

2

真宗

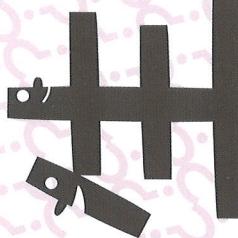
!!

まよ

る

!!

往生って実は…

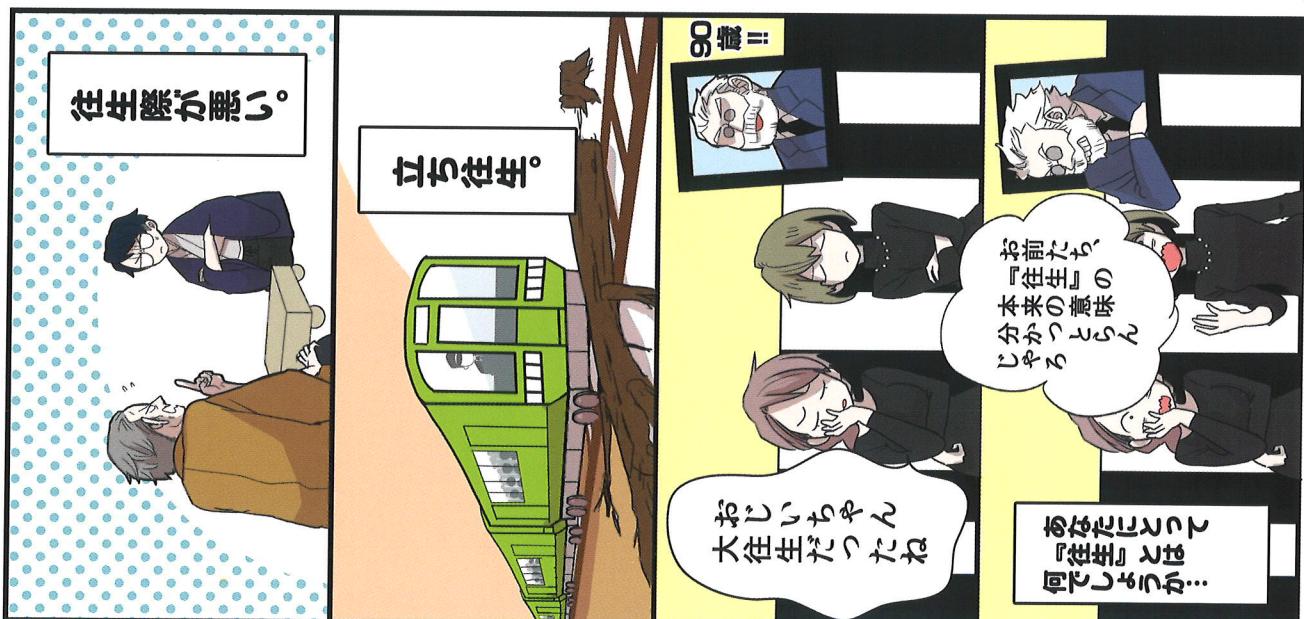
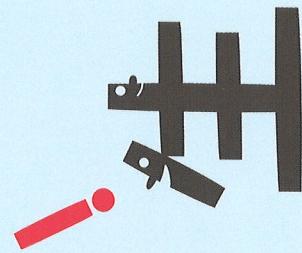


真名古屋別院

〒460-0016
名古屋市中区橘2-8-55
TEL 052 (321) 9201
FAX 052 (321) 3184

<http://www.ohigashi.net/>

お東ネット 検索



往生

おう

じょう

せ

眞宗

セ

私たち、お身内が逝去された方が
らご通知をいただくことがあります。そ
の文面に、たとえば「かねて療養中の父
は、家族の看護のかいもなく、このたび
鬼籍に入りました。生前のご厚誼を感じ
謝申し上げます」などと記されている場
合があります。一方、同じ内容で、「往生
の素懐を遂げました」と記されている
場合もあります。

「鬼籍に入る」と「往生の素懐を遂げ
る」——。いずれも丁寧な表現であると
は思いますが、逝去された方に対して、
真宗の門徒として、どちらの言葉をとる
ことが適切でしょうか。

手元の『広辞苑』(岩波書店)には、
<鬼籍>の項に、「(「鬼」は死者の意)
過去帳。[鬼籍に入る]死んで亡者の籍
に記入される。死亡する」と記されてい
ます。また<往生>の項には、「①この
世を去って他の世界に生れかわること。

特に、極楽浄土に生まれること。②死ぬ
こと。③あきらめてじつとしていること。どう
にもしようがないこと。閉口」と記されて
います。

逝去された方に対し、前者の「鬼籍に入
る」よりも後者の「往生の素懐を遂げる」と
いう表現の方が、浄土真宗の伝統に則った
適切な言葉であるということができます。
ただ、新聞の文面などをみると、現代で
は、<往生>という言葉は、「結果がすでに
出ているのに、往生際が悪い」とか、「質問
に答えられず、まるで弁慶のように演壇で立
ち往生した」、あるいは「交通渋滞で道路が
混んで、とても往生した」などという言葉づ
かいをすることが多いようです。

親鸞聖人は、<往生>について、
往生というは淨土にうまるというなり。
(『尊号真像銘文』・『真宗聖典』521頁)
<鬼籍>の項に、「(「鬼」は死者の意)
過去帳。[鬼籍に入る]死んで亡者の籍
に記入される。死亡する」と記されてい
ます。また<往生>の項には、「①この
世を去って他の世界に生れかわること。

「神の国」です。対して、淨土は阿弥陀
仏の建てられた国です。私たちに親しい
『正信偈』には、「蓮華藏世界」(蓮華の
花のように清浄で美しい世界)、「無量
光明土」(はかりなき光の世界)、「安養
界」(心を安んじ身を養う世界)などと、
豊かな表現で詩われています。

淨土真宗の根本聖典である『大無量
壽經』によれば、私たちは、信心の一念
において、そのようなみ仏の世界に「す
なわち往生を得る」(即得往生)と、つ
まりお念佛において、このように説示さ
れる淨土と直ちに接点をもつことがで
きると教えられます。この念佛の信にお
いて、往生淨土の一筋道に立つといふこ
と、それが、たとえば『往生論』(『淨土
論』)を著した天親菩薩、『往生要集』
を著した源信僧都などの真宗の祖師
方、そして宗祖である親鸞聖人が言葉
を尽くして教えてくださったことです。
私たちは、<往生>の本来の意味を見
失わないようにして、この語を用いたい
ものです。

やすとみ しんや
安富 信哉 (大谷大学名誉教授)